

話題提供

和田敏子（社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事・福祉事業部長）

（和田） 改めまして、社会福祉法人世田谷ボランティア協会の和田と申します。よろしくお願いたします。

私が最後をお引き受けし、私の役目は、この後の沖倉会長にバトンタッチをするという役目というふうにお題があるので、私が東京都の自立支援協議会セミナーで、もちろん私の所属いたします、そして私が日々仕事をしております世田谷区の話もちろんするのですが、それも通しまして、東京都の自立支援協議会の一委員とさせていただいた中で、どんなふうにご覧したり、考えたり、それから感じたかということも含め、うまくバトンタッチできれば良いというふうに思っております。少しお話を聞いていただければと思います。

今日は本当にこんな貴重な機会を私にくださった東京都にも、そしておいでいただいた皆様も、そして現場の皆様、先ほど舞台裏でみんな話しましたけれども、10日締め、このぎりぎりの中で、こんな日程設定は誰がしたという話もしたのですが、そんなご多忙の中お話を聞きにきてくださったこと、心よりお礼申し上げます。次回からは10日を避けて設定するというふうに東京都とお話をしました。

そんな些末なことを話していると時間がどんどん過ぎてしまいますが、世田谷から考える相談ということで、私、20分間だけお話をさせていただきます。

皆さんが各区の地図を出されているので、あえて、しかもちょっとピンぼけをしている私のようになっているのですが、ただいま世田谷区総人口88万とありましたが、限りなく90万に近づきつつあり、今後はどうなっていくのか。それこそ板橋のお話ではありませんが、一相談員にとっては、人口が増えていくこと、ともに障害のある方々、高齢の方々、子供たちも含めてどうなっていくのかということ、見通しが立つわけでもなく、一地域の中からお話を少しずつ進めていきますが、とにかくとても広く、とてもたくさんいるということをまず共感していただければと思います。

地域と障害者ということで、多分ご存じの方は多くいらっしゃると思いますが、区の自立支援協議会もそうですけれども、地域相談も含めておおむね5つのエリアに分かれております。烏山、砧、

玉川、北沢、世田谷というふうに5つに分かれていまして、その5つのエリアの中で主に、もちろん重複したりとか飛び出すこともありますが、重ねて動いております。

とてもたくさんの方がいるということもご存じかと思えます。なおかつ、この地域の特徴として、私が世田谷で仕事を始めるようになりまして20年近くたちますけれども、とてもある意味では特徴のある、先ほどの板橋さんのお話も特徴があり、東大和さんもそうですけれども、世田谷には皆様のところと同じように特徴があると思っております。

障害のある方にとって、特にお話をさせていただきますれば、精神科単科病院に近い形の大きな烏山病院と松沢病院があるということ、それから、支援校として歴史の長い光明と、それから青鳥があるということ、これはある意味で世田谷区の特徴かなとも思っております。

また、市民活動としての歴史も長く、また、市民活動の数も物すごくたくさんあります。たまたまそれは私が社会福祉法人世田谷ボランティア協会というところでボランティア活動の方々のコーディネートさせていただいているということもありますが、とにかく、赤ちゃんからママたちから高齢の方まで、たくさんの方々の市民活動のグループがボランティアであるということも区の特徴の一つだということに思っております。

皆様がお話しになっていましたので、まず先に、世田谷の地域自立支援協議会を含め地域包括ケアシステムというのは特徴的なので、お話しくださいと東京都の方からもお話がありましたので、簡単にお話しします。

地域包括ということで、世田谷では、「あんすこ」と短く呼んでおります「あんしんすこやかセンター」というのが27カ所、地域包括支援センターとしてあります。そして、普通、地域包括というと高齢の方に限っていますが、世田谷の場合は、平成28年7月から、もちろんその前から準備をしていましたが、高齢者に関わるご相談に加えて、障害のある方、それから子育て中の方など、とにかく身近なご相談を「あんしんすこやかセンター」でとりあえず受けるという体制に変わっています。したがって、ここが重なることになりま

す。それとともに、障害のほうでいえば、基幹相談センターというのが世田谷区立総合福祉センターというところで行われています。梅ヶ丘にありま

す。自立支援協議会の運営や人材育成、基本相談、それから指定地域相談や特定指定相談を支援するというバックアップ事業という形になっています。

それから世田谷の自立支援協議会です。世田谷の自立支援協議会は、先ほど図でお示しましたように、地域別の5地域部会（エリア部会）と地域移行部会、権利擁護部会に分かれております。したがって、これを見ていただいてもわかりやすいとおり、どこからどこまでという線引きよりは、むしろ、お互いに重なり合う包括システムというような体制をとっております。

5カ所の地域障害者相談支援センター、これがほかの区と少し違って、障害に特化した形で、先ほどのあんしんすこやかセンターともちろん重なるのですが、それとは別に各地域5カ所に地域障害者相談支援センターというものが置かれています。エリアも、先ほどと同じように5地域に分かれ、それぞれに障害に特化した相談を全て受けるということになっています。つまり、お子さんのことから、ある意味では高齢の方の障害にかかわる相談についてお受けしますよということになっています。

さまざま地域特性もありますので、とても20分間でご紹介することはできませんが、こういうやり方をしている世田谷区だということを、今日は聞いていただければ、知っていただければと思います。

そして、皆さんがお触れになっているのでちょっと触れますが、計画相談ですね。世田谷特定指定計画相談事業所38カ所。ひょっとして更新していて、これが最終更新ではないかもしれませんが、もうちょっとあるかもしれませんが、これだけです。したがって、当然足りないのは誰が見てもわかることで、不足状態ということはもう認めませんが、人口も含め、現状も含め、そういう状態にあるということをお伝えします。

我が身を振り返って、じゃあ、私が何をしているかということで、日常的には、計画相談の相談員と、もう一つ柱としては、高次脳機能障害の専門相談員として相談を受けています。これに関しましては、本日主催していただいています東京都の心身障害者福祉センターの方々と、立ち上げ同時からずっと一緒に高次脳機能障害の方々の相談をやらせていただいていた、とても心強く思っここまですべてしてきました。そのこともやりながら、現在は相談員として、特定計画の相談約50件を持っています。

そのほか、私どもの法人で、先ほどの地域障害者相談支援センターとあって、世田谷の地域、三軒茶屋とか世田谷の区役所のそばですね、あの辺の地域の地域障害者相談支援センターの事業を受託していますので、そのバックアップスタッフもしています。それから、先ほどの高次脳機能障害の経過の流れ、計画相談の流れとして、どうしても私どもの法人としては、退院直後の方たちの、中途障害の方の相談件数が非常に多く、介護保険の2号被保険者の方のケアマネジャーも少しだけ現在行っています。

そんなことで、ちょっと疲れたなというのが正直な毎日ですが、多分、ここにいらっしゃる皆さんも日々とてもお疲れになっていたり、大変だったり、忙しいかなというふうに思っています。

加えて世田谷では、このたび、若年認知症当事者のための社会参加プログラムというのを始めました。これを私どもの法人で受託して、現在、若年性認知症当事者の方のためのプログラムの開発事業にも着手しているところです。

そんなあっちもこっちも手を出してはいるものの、毎日毎日退院される方、きのうも退院された方、きょうも退院されるであろう方々も含め、そして地域の中でなかなか相談とつながらなかった難病の方々が最近とても増えておられ、難病の方々の相談も受けています。

こんなことを毎日毎日繰り返す中で、一方、東京都の自立支援協議会の委員もさせていただきました。きょう、ぜひ皆様に着目していただきたいのは、お手元にある資料の中にぱらっと入っているように見えるのですが、私にとってはとても大切な資料が後ろについています。「ライフステージを軸として」という資料があります。

最初に東京都自立支援協議会に入ったときに、しばらくしてから、ライフステージをつくりますから皆さん協力してくださいと言って、明けても暮れてもずっとブレインストーミングをさせられて、「何じゃ、この東京都自立支援協議会は毎回毎回会議をするのか」と。とにかく話し合い話し合いでした。どこに行くのだろうと思ったのですが、でも、今振り返ってみると、とても私にとってはこれが大事な、貴重な宝物だということをお伝えしておきたいと思っています。このブレインストーミングがなく、なおかつこの課題抽出の作業がなかったら、私は今相談員として、後輩たちに伝えることも、ひょっとしたらなかなかうまくできなかつたかなというふうに思ってい

ます。

すごいところは、東京都を別に褒めるわけでもなく、各地域から集まった自立支援協議会委員がこのブレインストーミングに参加すると、悩みが地域の特性を超えて同じなのですね。そして、課題もある意味では共通でした。乳幼児期から高齢までここにずっと書いてありますけれども、これが共通の話題として拾い上げられてきました。つまり、課題を抽出する作業をすることで、障害の方々、それから障害の相談を受ける私たちにとって、その課題はひょっとして東京の中では、またこの地域の中では共通なことではないかしらというふうに自分の中で整理することができました。

当時は、何だこりゃと思っていましたけど、今でこそ感謝をしています。それは私の中で、自分の人生の中で、学校を卒業してからここに至るまで、障害の方々とありがたいことにずっと一緒に、生活を含め人生をある意味でともに重ねてきた中で整理が少しずつできたからです。

それと、もちろん地域でもそうですけども、東京都の自立支援協議会では、障害当事者の方が必ず委員としてサポートをしていただきました。本当にサポートという気が私は今しています。今日ここへあえて書かせていただきました。一番最後の会議のときに、障害当事者の方が、どんなことを希望されますか、相談員にとか、職場でという話をしたときに、「必ずしてほしいことがあります。それは私の意見を聞いてください」という発言でした。それから「わかりやすく話してください」、この二つでした。原点に返ったような気が私はしました。相談員はこれに尽きるなとつくづく思った次第です。もちろん、思った次第ということは、この課題抽出の作業がなければ、ひょっとしたら過ぎ去っていたかもしれないなというふうに思っています。

そういった意味で、この東京都自立支援協議会というものでも、ブレインストーミングをすることとは、かみ砕いて言えば、地域でも、ブレインストーミングを含め課題抽出の作業がさまざまな形で地域の特徴を踏まえながら行えることが、ひょっとしたら一つのポイントになるのかなというふうに今感じ、あえてお伝えをしています。

現場ではということで、例えば私どもの現場で、若い相談員もいるのですけれども、例えばアパートが見つからないのですね。約90万近い世田谷区の中で、精神の障害の方、身体の障害の方がたくさんいらっしゃるわけで、単身生活をするとい

う方もいらっしゃるのですが、なかなか一般のアパートが見つからないのです。断る理由はもちろん、大家さんを含め不動産屋さんさまざまです。皆さんのところでもそうだと思います。

でも、新人の相談員は必ず私に食ってかかります。「これは和田さん、差別ですよ」って。若ければ私も「そうね」と言ったかもしれないですけど、今は、「『差別です』と言っても物は解決しない」というふうにその相談員に必ず言うようにしています。ふんぷんで帰ってくるのですね、不動産屋から。そのときに、差別ということではなく、じゃあ私たちは相談員として何をしていくのかなということをここ数年考え、作業をしてきました。

まず私たちが考えたのは、障害当事者の方たちは、私たちは日常生活ほぼ仕事の中で一緒にさせていただいていますので、別に危険人物であるとも思っていないし、何かが起こるとも思っていないのですが、一般の方々はどう思っているのかなということをどうやって知っていただくのかなということを、先ほどの「差別です」から始まりましたけれども、そんなことから考えました。

この画面に出ている方は実方裕二さんとおっしゃる方です。ごらんのように脳性麻痺の方でいらっしゃるようです。世田谷で、この右手に見えます電動車椅子で、背中に大きなバッグを背負い、背中のバッグにはおいしいスイーツがたくさん入っています。自分で販売をされています。もちろん、役所に行くのも当然ですし、あっちで会議がある、こっちで会議があるといったら、この電動車椅子で販売をされています。

もちろん、手も、お話も、脳性麻痺の方でアテトーゼがあるので、うまく伝わりませんが、歩くこともおできになりませんが、とにかく彼とコミュニケーションをとったサポーターの人たちがお菓子を、そして、ある意味では、今はもう起業されていますので、事業主として雇用して、お菓子を販売する社員さんたちにつくらせています。「ゆうじ屋」という小さい看板もありますが、数年前に世田谷の三軒茶屋でご自分でついにお店を出されて、夜は、バーというか、居酒屋というか、それも経営されています。

「まあすごい」と、私はいつも驚きながらも、この後ろのかばんを、結局あけられないので、お客さんが後ろのかばんをあけ、後ろから好きなスイーツを出し、お金を彼に払い、全部お客さんがするのですね。彼はただ座っているだけなのです

ね。たまに若い女の人だとまけてくれたりするのですが、私には絶対まけてくれません。

そんなやりとりをしながら、彼は、世田谷で福祉関係の人で知らない人はいないし、ひょっとして知らない人はほぼいないかもしれないぐらい有名な人ですけども、そんな彼がそういうふうにいるということを一一般の方々に、ぜひぜひお菓子を通じて、また活動を通じて、また自立支援協議会を通じて知っていただくというのも大事な私たちの仕事ではないかしらということで、自立支援協議会で登壇していただき、彼の人生を話していただきました。

ヘルパーさんたちも含め、事業主さんも含め、それから一般の民生委員さんも、とても感動していただきました。先ほどもそうですけど、障害のある当事者の方が語ってくださることはとても大事で、重みがあって、そして伝わるな、一番早いというふうに思っています。きっと皆さんのところでもそうではないかしらと思っています。世田谷に、もしおいでになって、すごい勢いで電動車椅子を飛ばしている人がいたら、それは実方さんとおっしゃる方です。

そして、さらに私たちは仕掛けということをしています。「ごきんじょ市」という仕掛けを、実は今年に関しましては12月11日、今週の日曜日に三軒茶屋のふれあい広場でお祭りをします。よくある福祉のお祭りと思われるかもしれませんが、これは大分趣が違ってきます。これは、私たち世田谷地域障害者相談支援センターが、自立支援協議会も含め、区も含め、お力を借りながら仕掛けている仕掛けです。

何が違うかということ、高齢の方も、障害の方も、いつもいつも比較的支援を受け、サービスを受け、ケアを受ける側ですね。この「ごきんじょ市」は逆です。基本的には、ここに登場する高齢の方は、デイホームに行っていらっしゃったり、ある意味ではグループホームにいて認知症と言われている方かもしれませんが、ここの「ごきんじょ市」に参加されるときには、輪投げのコーチになったりします。つまり指導する側、サービスをする側が変わっていきます。

そのほか、世田谷の近所にあります昭和女子大、それから駒沢大学の学生さんたちが、それぞれの地域にある福祉施設や保育園などを生まれて初めて皆さん見学に行かれ、そこを取材し、インタビューし、子供たちや障害の方、高齢の方のビデオ撮影をし、自分たちがそこでどんなことを感じた

かというのを報告したり、そのほか、商店街でやりますので、商店街の方もたくさんお店を出して協力をしてくださり、販売をさせていただきます。

ちょっと見たら、あまり障害の方とか、高齢の方とか、福祉的なというふうには感じないかもしれません。ぜひぜひこの「ごきんじょ市」に来ていただければと思いますが、この「ごきんじょ市」もきっかけはさっきと同じなのです。

私たちは、たまたまお一人の方のアパートをどうしても見つけなきゃいけないといったときに、立て続けに5軒の不動産屋さんに断られたのですね。かなりへたって、もうだめかなと思ったのですけれども、最後にはうまく何とかご協力いただける不動産屋さんがいたのです。やっぱり、その方は脳卒中の方で、少しだけ麻痺があって、お仕事もされていたのですが、体が悪いということを問われたので、40代で若くして脳卒中ですと言って、断った理由はやっぱり、勝手にアパートで倒れられたら困るからみたいな理由だったのですね。

障害があるということとか、病気になったということ、そういうことを理解するというときに時間がかかるなということをととても強く感じました。よって、この「ごきんじょ市」をすることで、お互いに知り合うきっかけになってもらえばということで、障害の方だけではなく、高齢の方だけではなく、ママたちも含めて、赤ちゃんもお子さんも含めて、実はイベントをするに当たっては、作業療法士会の方が折り紙を折っていたりとか、いろんな仕掛けもしてあって、いろんなことがここに来ると体験できたり、味わえたりするよという「ごきんじょ市」の仕掛けは、結果はすぐには出ないけれども、何らかの形で、障害当事者の方たちを含めて一般の方にそういうことを知っていただきたいということです。

ことしの1月に第1回目を開いたのですが、約2,300人の来場者がありました。それは多分、障害のイベントとかということなく、ごく普通に来てくださった方々が多かったかなというふうに思っていますが、普通の商店街の方々に意見を聞いたりとか、その後いろいろ反省会をしたとき、私たちは思わぬことをたくさん知りました。後で相談員たちと話したのですが、「私たち地域をやっぱり知らないね」と。皆さんのことを、「障害のことをちっとも知らないね」とか日常的に話しているけども、「いや、実は私たち、地域のこと、町のことを何も知らなかったよね」というこ

とが話されました。

例えばこのイベントが終わったときに、カレー屋さんのおじさんが声をかけてくれて、カレーパンを後半ただで配っちゃって、「ただでいいんですか」と言ったら、「いいんだよ。本当はこういうことを今までやりたかったんだけど、どうやったらいいかわかんなかった。そういう機会がなかったから、こんなことができるんだったら、いいさ、カレーパンぐらい」と言って、カレーパンをただでいただいてしまったりとか、商店の皆さんも、地域の皆さんも、何かしたい、何か役に立ちたいと実は思っているけれども、なかなかそのきっかけが見つからない。

皆さんもそうですけど、私たち日常的に障害の方の復職とって、ハローワークとかいろいろ苦労されていると思うのですが、このときも商店街の人にちょっとセーターを引っ張られて、「何ですか」と言ったら、「うちでもさ、障害の人っての、雇ってみたいんだけど、どうしたらいいのかわかんないのよ」って言われたのですね。ああ、やっぱり、そういうふうにやりたいと思ってもわからない、わかりにくい仕組みなのだな、近所でそう言ってもらったら、幾らでもご紹介できるということが、今までそういう機会を、私たちのほうから地域のほうに近づいていかなかったのではないかしらというのが私たちの大きな反省でした。

よって、やっぱり地域を知ろうということで、今回、商店を回って豚汁つくろうというテーマになっていますけれども、三軒茶屋というのは結構古い町なのでいろんなお店があります。おみそだけ売っているみそ屋さんがあるのですね。若い人に話すと、「みそをどうしてみそ屋で売っているんですか。スーパーで買うんじゃないんですか」と言われたのですけれども、そのときに改めて、自分は年寄りだなと思いましたが、「おみそはみそ屋で買うんです」という話をしながら、おみそさんが三軒茶屋にはあるのです。豚肉を売っている肉屋さんもあって、そこには豚カツもあつたりしますみたいな、商店街を回ってもらうスタンプラリーをしながら商店を知ってもらう。そして、商店を回ってもらうときには、必ず昭和女子大のかわいい女子大生がスタンプを押してくれるという仕掛けをし、商店街の方も女子大生と仲良くなってもらいながら、大学とコミュニティーをつくっていくという仕掛けもしています。

いろんなやり方が地域ではあると思うのですけ

ども、こんな仕掛けを、世田谷の地域障害者相談支援センターを含め自立支援協議会では試みているというご報告をさせていただきます。

もう一つ仕掛けをご案内します。これは「いっしょに食べよ」という仕掛けです。食事会というのは最近割とどこでもされていると思いますいろいろなバックグラウンドに基づいた食事会をしていますが、これは先ほどと同じです。障害を問わず。スタートしたときは、正直、高齢独居の方と障害独居の方にターゲットを当てて食事会をしようかということで、世田谷自立支援協議会を含めた世田谷地域障害者支援センターで考えた事業です。

夕飯にしました。夕飯が寂しいという声を相談員が拾ってきたからです。夕飯を月に1回みんなで食べようということになりました。食べようといっても、うちから出られないという方がいました。「デイサービスの職員とか車とか使ったらいいんじゃないの」ということになり、エリアを分けなくて、デイサービスの夕方とか夜あいている車を使って、高齢の方や障害の方を必要があればお迎えにいきます。

そうこうするうちに近所のママたちが集まってきました。ちょっとしたきっかけです。心に病のあったママがいて、そのママがママに声をかけ、ママがママに声をかけ、ママ友たちがすごい勢いで集まり、今は子供たちが障害と高齢の方たちの間を縦横無尽に走りながらの夕食会になっています。

コミュニティーは一度壊れたというふうに言われています、東京は。でも、その中でもし再生するとしたら、何らかの仕掛けをしていかない限りはなかなか難しいかと思います。障害当事者の方、高齢の方が一緒に暮らしていくのは、何か、ひょっとしたら自然体では難しく、幾つかの仕掛けや、自立支援協議会も含め何らかの枠組み、きっかけをつくりながら、新しいコミュニティーをつくっていくのかなというふうに思っています。

とにかく、小さな仕掛けなのですけれども、物すごく盛況になっていて、パンクしそうな状態ですが、この中には、障害のある方も、ない方も、一緒にお皿を洗ったり食事をつくったりということで、楽しく過ごす仕掛けをしています。

まとめです。相談員の育成ということで、東京都の自立支援協議会を話してまいりましたが、百点満点の相談員はいないけれども、いつも話を聞いて解決できないことのほうが多く、解決

できないことは、逆に言えば、相談員は地域に相談していくという姿勢が大事ではないかというふうに考えています。

相談を通して人を知ったり、地域を知ったり、先ほどの私どもの拙い若い相談員みたいに「差別です」と言うのは簡単ですけれども、もちろん、そうではなく、それを通して地域を知っていきたり、地域をほんの少しだけ変えるきっかけをつくっていきたり、ともに考えるということを相談員みずからが行っていかなければ、先ほどのように、「障害の人をちょっと雇ってみたいんだけどさ、どうしたらいいの」という声を拾ってきたり、「夕飯ちょっと一人じゃ寂しいんだけど」という声を拾ってくるだけではなく、それを何らかの形で次への展開にする小さな力がなければ、商店街の人に声をかけ、お願いをし、頭を下げ、みそ屋さんに協力してもらいながら、地域を少しずつなげていくという活動が大事かなと思いました。相談に来る方のさまざまな暮らしの営みから学び続けていくということが、地域を紡ぐということかなというふうに思っています。

拙い話ですが、これをもって後の沖倉会長につなげられれば良いかなと思っています。

ご清聴ありがとうございました。